

知的障害児集団に対するクラスワイド PBS の展開

相互依存型集団随伴性に強化基準のランダム化を組み合わせた支援の効果

○永山宏平

（埼玉県立特別支援学校大宮ろう学園）

若林上総

（宮崎大学）

KEY WORDS: 知的障害 集団随伴性 SST

1. 問題と目的

集団を対象とした支援方略の一つとして、相互依存型集団随伴性が広く用いられている。相互依存型集団随伴性とは集団の各メンバーの遂行行動がその集団の強化基準を満たしているかによって、集団全員の強化が決定される手続きである(小島,2001)。この問題点として意図的に“サボる”参加者が表れるが、強化基準をランダム化し活動後に示す等工夫をすることで対応可能であると報告されている。上記のような手続きを定型発達児童集団に対して適用された知見は蓄積されているが知的障害児集団に適用された知見は少ない。よって本研究は、知的障害児集団に対して相互依存型集団随伴性に強化基準のランダム化を組み合わせた支援の効果を検証することを目的とした。

2. 方法

〈対象〉知的障害と聴覚障害の重複学級に通う小学部 4～6 年の児童 6 名（A～F 児）とした。知的障害特別支援学校小学部 2～3 段階の実態であり、日常生活場面のほとんどを共に過ごしていた。研究成果の発表にあたっては児童の保護者及び校長から承諾を得た。

〈標的行動と場面〉始めに学部教育目標や個別の指導計画を元に担任間でポジティブ行動マトリクス(大久保・月本他,2020)を作成した。その後、最も行動問題が生じやすい場面を話し合った。その結果、①休み時間場面における対仲間行動、②帰りの準備場面における準備行動が標的行動となった。具体的には、①は勝利や課題達成した際にハイタッチするなど喜び合う行動や、敗北または課題失敗した際に「残念だね」と言い合うなど仲間と慰め合う行動とした。②はより速い時刻に帰りの会を始めることを目的として速く着替えたり連絡帳を記入したりする行動であった。

〈期間と手続き〉期間は X 年 9 月～X+1 年 1 月末であった。①は週に 2 回程度 20 分休みの時間を設定遊びの時間として実施した。②は特別な授業がない限り毎日実施した。

〈指導手続き〉どちらの場面も BL 及び集団 SST 後に強化基準のランダム化と相互依存型集団随伴性を組み合わせた支援を実施した。①では、設定遊びの際に「仲よしポイント」として仲間に対して適切行動をした場合にはポイントが 1 つ加えられ、不適切行動をした場合には 1 つ減らされるようにした。遊び終了後、ランダムに強化基準が書かれたカードを 4 枚(強化可能基準と不可能基準が 2 枚ずつ)黒い箱に入れ、そのうち 1 枚を引いた。最低強化基準は 60%であったが、その上で 3 セッションにつき 1 セッションは必ず非強化事態とした(強化基準のランダム化)。「仲よしポイント」の総計が強化基準を超えていた場合、全員好きな衣装を着て集合写真を撮り「仲よしの木」の葉っぱとして掲示した(相互依存型集団随伴性)。②は児童全員が準備を終え着席したら帰りの会を始めるようにした。帰りの会終了後、ランダムに強化基準が書かれたカードを 4 枚(強化可能基準と不可能基準が 2 枚ずつ)黒い箱に入れ、そのうち 1 枚を引いた。帰りの会開始時刻の最低強化基準は月金が 14 時半、火水木が 15 時 20 分であったが、その上で 3 セッションにつき 1 セッションは非強化事態とした(強化基

準のランダム化)。帰りの会開始時刻が強化基準を超えていた場合、トロフィーが授与された(相互依存型集団随伴性)。

〈記録とデータの整理〉記録は第一筆者が事象記録法により行った。①については、児童一人一人の生起率を算出し(行動生起数÷全試行数×100)、その後に平均値を算出することにより全体達成率を求めた。

3. 結果と考察

結果を Fig.1 に示した。始めに①に対する集団 SST を実施した。その結果、集団 SST でのリハーサル場面において全員が自発生起率 60%を超えた。全員が遊び時の対仲間行動のスキルを獲得していることを確認し、休み時間において集団 SST と同様の手続きを導入した。介入後 2 セッションは全体達成率が上昇したがその後 3 セッション連続で下降している。個別にデータの推移を確認し、生起率が 60%を下回る児童 2 名に対して追加の支援(適切行動のモデリング)を行った。その結果、全体達成率が向上し 80%以上で推移した。②の取組は①の後に行われた。集団 SST では、これまでの帰りの会開始時刻を折れ線グラフで示し、本来は早く始めたい旨と理由を説明した。集団 SST のリハーサル場面において荷物整理や着替えスキルがあることを確認した後、帰りの会準備場面に移った。集団 SST 実施日は全セッションで最も短い 8 分であった。BL の平均経過時間は 14.5 分、介入後は 11.9 分と、2 分以上経過時間が縮まった。知的障害児集団においても、相互依存型集団随伴性に強化基準のランダム化の組み合わせた支援は標的行動にポジティブな変容をもたらすことが示された。

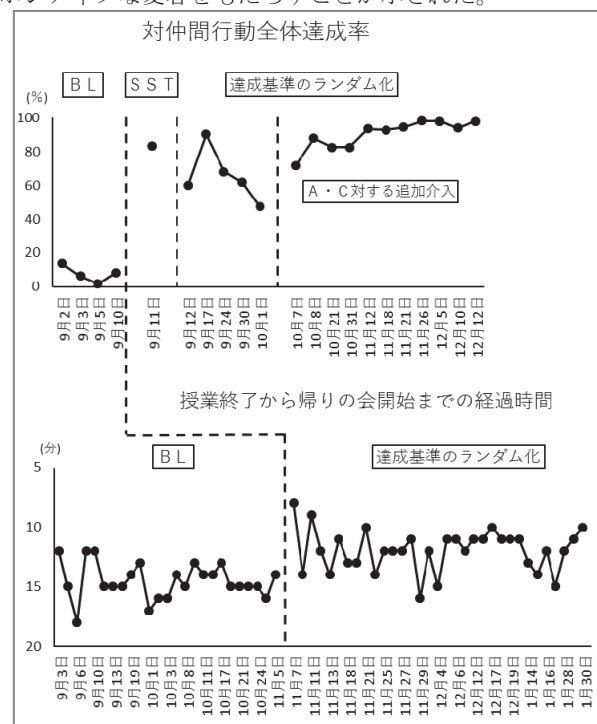


Fig. 1 ①及び②のデータの推移

(NAGAYAMA Kohei, WAKABAYASHI Kazusa)